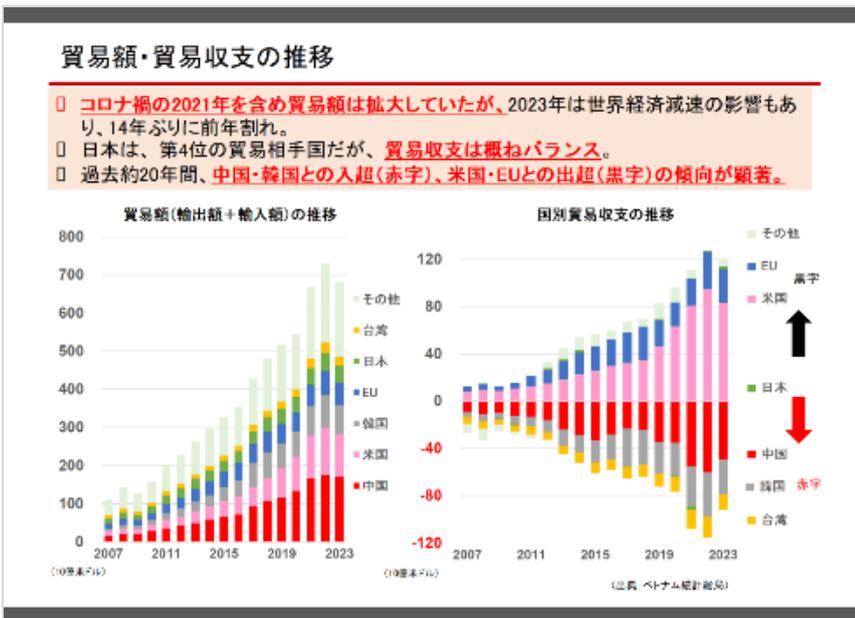


ベトナムの1人当たり GDP は昨年の段階で 4,284ドルでしたが、チン首相は来年 4,900 米ドルへ引き上げると発言しており、経済成長率が 6~7%であれば不可能な数字ではありません。

省毎に見ると、トップがバリアブントウ省で石油や天然ガスが出る場所であり 12,968 米ドル迄上昇しています。2番目がハロン湾のあるクワンニン省で 9,610 米ドル、今年もこの調子で成長すると 1 万ドルを超えます。ホーチミンが 7,097 米ドル、ハノイが 6,348 米ドルとかなりの所得水準になっているのが実態です。

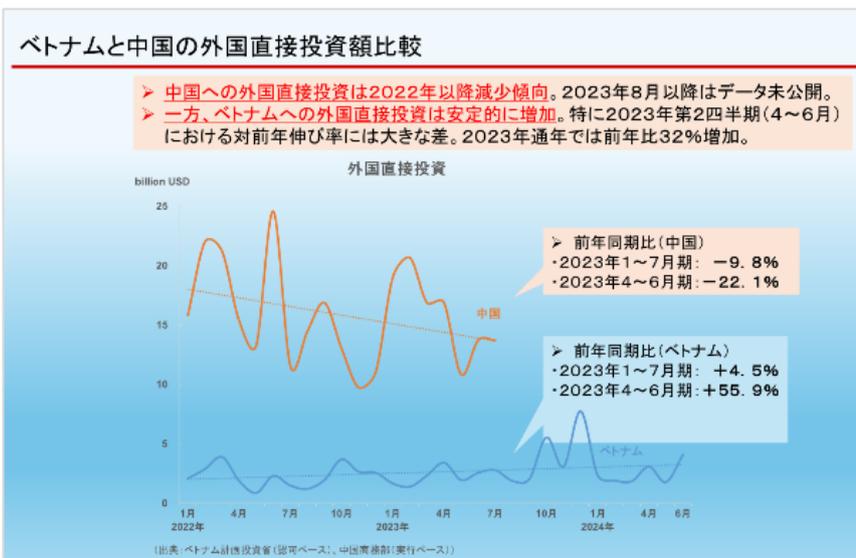
平均以下の省でも Foxconn が進出しているバクザン省などは、一昨年 19%、昨年 13%も伸ばしており、投資を誘致しやすい場所では凄まじい成長が起きています。ベトナムは独立 100 周年にあたる 2045 年に高所得国(世銀ベース:13,845 米ドル以上)入りする目標を掲げていますが、成長率が 7%伸びると仮定すると 1 人当たり所得は 10 年で 2 倍、20 年で 4 倍になりますので、今後 6%台の成長が続けば十分達成可能な数字です。



貿易についてですが、統計を見るとベトナムの経済構造の特徴をとともよく表しています。貿易額が一番多いのは中国で、米国、韓国、EU、日本と続きます。しかし貿易収支を見ると、対米と対 EU は大幅な黒字ですが、対中国・対韓国・対台湾は大幅な赤字で、日本だけ収支バランスがとれています。経済面で、実はベトナムの中で一番目立っている国の一つは韓国です。特にサムソンはバクニン省に大規模な生産施設を集積させており、サムソンのスマホの半分を占める 3 億台分はベトナムで組み立てていると言われています。但しサムソンは技術移転をあまりしてきてお

らず、ベトナムからの再三の要請を受けてようやくその話を始めようとしているところです。つまり、サムソンのスマホは、中間財を中国や韓国から輸入し、ベトナムで組み立て、それを欧米マーケットへ輸出している構造です。一方で日本だけは、例えばホンダのバイクは現地調達率 100%で、製造機器まで現地で組み立てています。技術移転もしっかり実施しているので収支がバランスしているのであり、その意味からも日本は最高のパートナーであるわけです。また、中国との貿易額が大きく中国への依存度が高くないかとのご意見もありますが、中国より輸入はしていますが、輸出はそれほどしていません。つまり中国マーケットへの依存度は低く、中国経済減速による影響を相対的に受けにくい構造になっています。もう 1 つ気になるのは、対米黒字がこれほど大きくて大丈夫かということです。我々日本はこの点で過去相当な苦勞を経験しましたが、ベトナム外交のしたたかさなのか、実は今年の秋まで為替

操作国の調査対象にもなっていませんでした。今でこそ調査対象にはなりましたが、これだけの貿易不均衡があるにもかかわらず、アメリカにおいてベトナムへ制裁をかけようとする動きは皆無です。さらに、米中関係は難しい状況にありますが、米中関係が悪化した後の方が中越関係と米越関係はむしろ良好になっています。その理由の一つは、安全保障や地政学にあります。台湾海峡は南シナ海と東シナ海双方につながっており、台湾有事は南シナ海有事にもなり得るからです。昨年アメリカの空母と日本の護衛艦「いずも」がほぼ同時期にベトナムへ入港しました。地域の安全保障環境が不透明性を増す中で、ベトナムはしたたかに大国との関係をマネージしていることが、このような展開からも読み取ることができます。



ベトナムへのサプライチェーンシフトの話も注目されていますが、その変化は如実に数字にも表れています。世界から中国への投資とベトナムへの投資を比べたグラフですが、对中国の直接投資は減少傾向にある一方で、対ベトナムは堅調に推移しており、今後伸びていくものとみられています。

半導体/ハイテク関連の最近の動向/報道ぶり(抜粋)

- APEC CEOサミット2023**
 「ベトナムは、科学技術、イノベーション、グリーン経済、デジタル経済、循環型経済、知識経済、半導体製造、新エネルギー(水素など)、再生可能エネルギー、金融センターの実現、グリーンファイナンス、バイオテクノロジー、医療の分野への投資誘致を優先している。」
(出典: 2023年11月18日付産経ニュース)
- 米越のビジネス及び地域をつなぐ円卓会議**
 「ベトナムは、ハイテク、チップ製造、半導体製造、グリーン経済、デジタル経済、キャッシュレス決済などの分野への米企業の投資を歓迎する。」
(出典: 2023年11月17日付産経ニュース)
- ティム・クックApple社CEOとの会談**
 「(越米関係の包括的戦略的パートナーシップへの格上げを強調し、)これはApple社にとってベトナムへの投資を拡大する絶好の機会である。特にハイテク分野はベトナムが優先し奨励する分野でもある。」
(出典: 2023年11月18日付産経ニュース)

また、IT等の高度な分野における経済活動の活発化もあり、ベトナムはASEAN諸国の中で最も多く理数系に優れた人材を輩出し始めています。すでにアメリカのIT企業や大学がベトナム人技術者に目をつけています。ポートピアでアメリカへ渡ったベトナム人も活躍していますし、昨年APECがアメリカで開催されましたが、その時のCEOサミットへトウオン国家主席が出席され、ベトナムは科学技術、グリーンイノベーション、グリーン経済、デジタル経済の投資を優先していると話されました。先日石破総理とチン首相が会談した際にも、チン首相の発言の中で、人的交流の次に

出てきたのがDX・GXでした。アセアン諸国との関係では、かつてはODAが存在感を誇っていた時代がありましたが、そこから製造業やサービス業の投資の時代になり、今ではイノベーション的な要素を含んだ協力が求められる時代になりました。特に、ベトナムは、理数系に強い高度人材を多数輩出し、欧米のハイテク産業から熱い視線を向けられ始めていますので、ベトナム側の関心

2. 指導者交替の続くベトナム政局 — トー・ラム新書記長の下で安定回復に向かうか？ —

ベトナムにおける頻繁な指導者交替が関心を呼んでいる。

- ベトナムの政治指導部の頂点にあるTOP 4 (共産党書記長、国家主席、首相、国会議長)だけでも、
 昨年1月: グエン・スアン・フック国家主席の退任
 今年3月: ヴォー・ヴァン・トゥオン国家主席の退任
 今年4月: ヴォン・ディン・フエ国会議長の退任
 今年5月: トー・ラム国家主席の就任、
 チャン・タイン・マン国会議長の就任
 今年7月: グエン・フー・チョン書記長の死去
 今年8月: トー・ラム新書記長の選出



2024年5月に開幕した国会第7会期において新国家主席及び新国会議長が選出された。

- 更に、TOP4以外の政治局員まで含めると、過去一年半程度の間ベトナムの政治局員18名のうちの半数に近い8名が交替。

政局に移ります。左に示しているように最近ベトナムでは、政治指導部のトップ4がどんどん交替しました。昨年1月には特に日本でよく知られていたフック国家主席が、今年3月には昨年日本に公式訪問されたトゥオン国家主席が退任し、4月にはフエ国家議長も退任しました。一方、後任の国家主席へ就任されたトー・ラムさんが、今年8月には書記長まで登り詰められ、国会議長へ就任されたマンさんも安定感がある方です。更にトップ4以外の政治局員も変わっており、18人のうち半数近くの8名が交替しました。

第13期党政治局員リスト (2024年8月26日現在)

政治局員15名

第13期党政治局員 (24年1月時点)

参考

因みに、左側スライドの右端(上段)のルオン・クオンさんは、つい数日前に国家主席に昇進されました。資料の修正が間に合わず、すみません。右側スライドは、今年初めの政治局員の陣容ですが、顔ぶれは大きく入れ替わってしまいました。

反腐敗キャンペーン

このように頻繁な指導者交替が起こる原因となっているのが、「反腐敗キャンペーン」。

故グエン・フー・チョン書記長が自らの政治生命を賭けて取り組んできた大事業。同書記長の葬儀では、弔問に訪れた市民の列が時間を過ぎても途切れることがなかった。

ベトナムが独立100周年となる2045年までに高所得国入りするという大目標を達成するために避けては通れない重要なテーマ。

腐敗は、ベトナムの社会制度に巣くう深刻な構造問題である。

ベトナムが海外から質の高い投資を呼び込み、更に高度な経済成長を遂げるためには、腐敗克服は不可欠。



党中央執行委員会総会でスピーチするグエン・フー・チョン書記長

このように頻繁な指導者の交替が起こった背景には、7月に亡くなられたグエン・フー・チョン前書記長の意向があります。チョン前書記長は、元々脳梗塞を患われており、ここ数年間は半身が不自由でした。そこへ今年1月大病を患われ、おそらく自分の余命を悟られたのだと思います。人事は5年に1回の党大会で決めますので、次の人事は26年1月の次期党大会で良かった筈なのですが、自分が元気なうちに後継を固めておきたいと考えられたのだと思います。そこで反腐敗キャンペーンというチョンさんがライフワークとして進めてきたものがあり、その絡みで何もの人が処分されました。

3. ベトナムの『竹外交』 —したたかな戦略的計算に基づく「全方位外交」—

Bamboo Diplomacy (竹外交)

(2016年8月に開催されたベトナム外務省主催第29回外交会議において、グエン・フー・チョン・ベトナム共産党書記長が提唱)

2021年12月に行われた党政治局主催の全国対外政策会議におけるチョン書記長演説

「根はしっかりと、身は固く、枝はしなやか」

「穏和で機知に富むが、大変堅強で決意が固く、試練や困難の前に柔軟で創造的だが、勇敢で筋を通し、肝の座った外交」

→ したたかな戦略的計算に基づく「全方位外交」

過去1年足らずの間に米中露の首脳がベトナムを二国間訪問

23年9月
バイデン米大統領訪越

23年12月
習近平中国国家主席訪越

24年6月
プーチンロシア大統領訪越

一方、2022年12月以降、日米韓豪との関係を「包括的戦略的パートナーシップ」に格上げ（それ以前の「包括的戦略的パートナー」は露中印のみ）

22年12月 韓国（フック国家主席訪韓）

23年 9月 米国（バイデン大統領訪越）

23年11月 日本（トウオン国家主席訪日）

24年 3月 豪州（チン首相訪豪）

もので、2022年12月迄は、ベトナムが「包括的戦略的パートナーシップ」を結んでいた国は露、中、印だけでした。その後、資料にあるように、ベトナムは日米韓豪との関係を立て続けに「包括的戦略的パートナーシップ」に格上げしました。

また、昨年12月、習近平国家主席がベトナムに来訪した際、中越両国は運命共同体になったとの報道が流されました。実は現地でベトナム関係者が私どもに説明していたのは、「運命や生死まで一緒にできるわけがない。隣国として未来の共有（「shared future」）を確認したのであり、この言葉はその前のASEAN中国首脳会議の文書でも使われたものである。」ということでした。ベトナムでの発表を見ると、ベトナム語と英語の両方とも「shared future」となっていました。本当にしたたかな国だと思います。

次にベトナム外交についてですが、極めてしたたかな計算をしている、戦略的計算に基づく全方位外交であると思います。

彼らは自分たちの外交を前書記長のチョンさんの言葉で「竹外交」と呼んでいます。要するに根はしっかりと張り、身は固く頑強にし、枝はしなやかに立ち振る舞い、したたかに戦略的計算に基づいてどちらから圧がかってもまっすぐ対応し、全方位へしっかりと対応せよとのことでした。

そんな外交が、本当にうまくいくのかと思ってしまうのですが、実際に起こったことを見てみると、1年たらずの間にバイデン大統領、習近平国家主席、プーチン大統領がみんなベトナムを訪問しました。おそらくこんな国は他にないと思います。先程申し上げたように、米中関係が悪化してからのほうが、中越関係と米越関係が良くなっており、フィリピンとも最近ベトナムの国防大臣が先方を訪れて連携を深めています。南シナ海のフィリピン側では、近年中国の公船の活動が活発化していますが、ベトナム側ではここ暫くは概ね平穏です。

さらに米中露の首脳来訪だけを見ると、3カ国のうち2カ国が共産国なので、やはり向こう側を重視しているのかなと感じる方もおられると思いますが、他方、ベトナムが近年、二国間関係を「包括的戦略的パートナーシップ」に関係を格上げた国を見ると、西側の民主主義国ばかりで、今のベトナムが如何に西側との関係を重視しているかがわかります。「包括的戦略的パートナーシップ」というのは、ベトナムが最も高い格式の関係と位置付けている

トー・ラム 新書記長の 発言・動向

1. 発言

- 2024年5月の国家主席就任時に「ベトナムの『竹外交』の特色を維持する」旨発言。
- 8月の書記長就任後のインタビューでは、「すべての国との友好を深める方針だ。これが私たちの外交政策であり、変えることはない。」と発言。
- 一方、書記長就任後は、『竹外交』に明示的言及なし。

2. 動向

- 8月、書記長就任後の初外遊で中国を訪問し、習近平国家主席と会談。
- 9月、訪米し、国連未来サミットに出席、バイデン大統領と会談、米大手IT企業等と面談。

トー・ラム書記長になって、ベトナム外交に変化があるかということですが、NHK のインタビューで「全ての国との友好を深める方針だ、これが私たちの外交政策で変わることはない」と回答され、新書記長も「竹外交」の路線を維持しておられると思います。ただし「竹外交」というのはチョン書記長が考え出した言葉で、トー・ラムさんは国家主席の時までは使っていましたが、自分が書記長になってからは言わなくなりました。別のキャッチフレーズを考えておられるかもしれませんが、

路線はあまり変わらないかもしれません。

それから8月の書記長就任後、最初に中国を訪問されたので、やはり中国を向いているのかと思われる方がおられるかもしれませんが、日本で大きな報道はされていませんが、トー・ラム書記長は9月に訪米し、国連未来サミットへ出席、バイデン大統領とニューヨークで二国間会談、さらにSpaceX、メタなど米大手IT企業からも大歓迎されています。

第79回国連総会におけるバイデン米大統領スピーチ (ベトナム関係部分抜粋) 2024年9月24日 於ニューヨーク

- I've seen a remarkable sweep of history. I was first elected to office in the United States of America as a U.S. senator in 1972. (略)
- I was 29 years old. Back then, we were living through an inflection point, a moment of tension and uncertainty. The world was divided by the Cold War. The Middle East was headed toward war. America was at war in Vietnam, and at that point, the longest war in America's history. (略)
- The United States and the world got through that moment. It wasn't easy or simple or without significant setbacks. But we would go on to reduce the threat of nuclear weapons (略) through arms control and then go on to bring the Cold War itself to an end. Israel and Egypt went to war but then forged a historic peace. We ended the war in Vietnam.
- The — last year, in Hanoi, I was — met with the Vietnamese leadership, and we elevated our partnership to the highest level. It's a testament to the resilience of the human spirit and the capacity for reconciliation that today the United States and Vietnam are partners and friends, and it's proof that even from the horrors of war there is a way forward. Things can get better.
- We should never forget that. I have seen that throughout my career.

またバイデン大統領はトー・ラム書記長の米国滞在中に国連スピーチをしました。国連スピーチですので、別にベトナムに言及する必然性はなかったのですが、テキストを見ると、「自分が政治家になった72年頃はベトナム戦争中だった。アメリカの歴史上最も長い戦争であった。しかし我々は戦争を終わらせた。そして昨年ハノイへ行き、ベトナムのリーダーと会談し、我々のパートナーシップをかつてないレベルへ高めた。これは対立を乗り越えて友好関係を確立するた

めの世界に模範になるような関係である」というベトナム満載の内容でした。バイデン大統領が、トー・ラム書記長の米国滞在中にこのスピーチをしたことは、外交的にかなり意味があると私は見えています。つまり、あのプーチン大統領がベトナムを訪れたにも拘らず、アメリカはベトナム重視のスタンスを変えていない。サプライチェーンのシフトや、南シナ海の戦略的重要性が一層高まっている状況の中で、アメリカは、官民を挙げてベトナムを重視する方針を取っています。

さらに大統領選挙の結果は分かりませんが、トランプ氏が大統領時代にベトナムを好み、金正恩とベトナムで会談したという事実はご記憶にあるかと思います。実は金正恩との会談のアレンジを手伝ったのはベトナムの公安で、そのトップにいたのがトー・ラムさんです。そういう意味では、おそらくベトナムはアメリカの政局の影響をあまり受けにくいのだと思います。ベトナムは、上手にしたたかにこれからも対米外交をやっていく可能性が高いと私は見えています。

4. 日越の「共感と共鳴」の原点

日越の「共感と共鳴」の原点

1. 精神文化における共通性：

- ・ 大乘仏教、
- ・ 儒教（科擧の制）
- ・ 漢字文化圏

2. 歴史的交流：

- ・ 8世紀（仏哲、阿倍仲麻呂）
- ・ 16-17世紀（朱印船交易、ホイアン日本橋、アニオー姫）

3. 里山コミュニティ：

- ・ 協調性を重視する社会

最後に日本とベトナムの繋がりについてお話します。確かに、ベトナムの方は日本人といろいろ違うところもあり苦勞もしますが、一緒に飲んで盛り上がると意気投合するとか、泣かされてしまうようなシーンも結構あるわけです。特に離任の時に、これほど皆さんに温かく名残り惜しがっていただいた国はありませんでした。先日 AZEC 首脳会議へ行った時にチン首相やベトナム高官の方々とは久しぶりにお会いすると、本当に皆さん懐かしがってくださいました。

昨年日越外交関係樹立 50 周年を祝いましたが、その時のキーワードが「共感と共鳴」でした。何故このような言葉が出てきたのかということを理解いただくためのヒントをいくつか提供したいと思います。

一つ目が精神文化における共通性です。日本とベトナムは、ともに大乘仏教、儒教、漢字文化圏です。二つ目は歴史的交流が長いということ。ベトナムと言うとどうしてもベトナム戦争の話になりますが、その前から長い関係があったわけです。三つ目が日越ともに里山の国であるということです。日越の国土を見ると、ともに高低差があり、降雨量が多く、温暖で、川が流れ、土地が肥えている。里山を生み出すための条件を備えています。日本の里山の専門家がベトナムの里山保全のために協力され、書かれている論文もあります。自民党の先生方は何故ベトナムが好きなのか、日本のリーダーは村長（むらおさ）的な素養がある方が多いのと同じように、ベトナムのリーダーもホーチミンさんが典型ですが、チョン書記長もそうだったし、チンさんやトー・ラムさんもそうかもしれません。

1. 精神文化における日越の共通性

・ 大乘仏教圏、儒教圏、漢字文化圏

- 精神文化的には、越は、北東アジア圏
- ラオス・カンボジア以西は、小乗仏教、ヒンドゥー教、サンスクリット文字の影響大

・ 科擧の制：ハノイの「文廟」と「湯島の聖堂」「足利学校」

- 越は多くの理数系人材を輩出
- 北東アジア的なIT等の技術集約的成長を志向

北東アジアに共通する文化・歴史圏 大乘仏教が主流



出典：ルバート・ゲシン Rupert Gethin licensed under CC-BY-SA 3.0 00₃

まず精神文化における日越の共通性ですが、この地図の黄色で塗りつぶされた場所は、大乘仏教の影響が強い地域です。大乘仏教の地域は、ほぼ儒教圏や漢字文化圏と重なります。日本、中国、台湾、韓国など、北東アジアの国や地域は概ねこの三つの要素を備えているのです。一方、ASEANの中ではこの3つの要素を持っているのはベトナムだけです（正確にはベトナムの北

漢字文化圏



半分。南側はかつてヒンドゥー教。)。インドシナ半島の他の所でも仏教は盛んですが、大乘仏教ではなく上座部仏教（小乗仏教）です。文字を見ても、クメール文字やミャンマー文字、タイ文字のようにサンスクリットの影響が強いものが使われています。それから儒教の影響はほぼなく、一方で、ヒンドゥー教の影響が強い地域です。だからインドシナ半島とはよく言ったもので、ベトナムだけは中国の影響を受け、ベトナムから見ると険しい山岳地帯の反対側にあるラオスやカンボジア、そしてその向こうのタイやミャンマーではインドか

らの影響が強かったのではないかと思います。

もう一つ言えるのは、この黄色の地域、すなわち日本、中国、韓国、台湾そしてベトナムは、理数系に強い人を輩出している地域だということです。ベトナムは、現状ではまだ IT に強い地域と確立されたとは言えませんが、皆さん大きなポテンシャルを感じ始めています。ベトナムを見る時は、そこを押さえておかないといけないと思います。

ベトナムが漢字文化圏だということをわかりやすく知る方法は、古いお寺に入ることです。そこは漢字だらけです。お寺の形もなんとなく中国っぽい感じで、これがラオスに行くと漢字は全く無くなり、サンスクリット的なラオス文字による表記となり、建物も尖がった感じのヒンドゥー系というか、我々からすると異文化の建築になってくるのです。

儒教の影響



孔子を祀った文廟。
文廟では、科挙の試験が行われていた。合格者の名前を記載した石碑が保存されている。

日本にある孔子廟 湯島聖堂（1690年創建）



孔子像

ベトナムは儒教の影響も強くみられます。左の写真は文廟という UNESCO 世界遺産に指定されている孔子廟です。ベトナムでも科挙の制度が随分長く続き、ここに受験者が参拝していました。地方の方が一生懸命勉強して進士になり昇進するというのがベトナム的サクセスストーリーだったのです。それと日本の湯島の聖堂は非常に似ています。

2. 日越の歴史的交流

・ 8 世紀：

- 東大寺の大仏開眼式に林邑僧・仏哲が渡来。林邑楽（雅楽の源流の一つ）を伝える。
- 阿倍仲麻呂がゲアン省付近に漂着。後に鎮南都護としてハノイに在勤。

・ 16~17世紀：

- 朱印船交易が隆興。陶器、織物、香木などがもたらされる。
- ホイアンには大規模な日本人街（日本橋、アニオー姫）。

林邑僧・仏哲が、東大寺大仏開眼式で林邑楽を奉納

古くからある日本とベトナムの直接交流
8 世紀頃から始まる日越間の交流の端緒

仏哲

736年に来日、東大寺大仏開眼式で林邑楽（りんゆうがく）を奉納



2010年、ベトナム文化・スポーツ・観光省文化技術研究院の林邑楽演奏団が訪日した際、一田昭明理事長が林邑楽を披露

ベトナムと日本との間には長い歴史的な繋がりもあります。8 世紀の東大寺大仏開眼式の時には、林邑僧（林邑：現在のベトナム南部）の仏哲さんが来て、雅楽の源流の 1 つとして認められている林邑楽を伝えたということです。現在も、この時に披露されたとされる迦陵頻（かりょうびん）の舞のパフォーマンスが行われています。

同じく 8 世紀、阿倍仲麻呂さんは、唐から日本への帰国途中に難破してベトナムのゲアン省に漂着しました。その後はハノイ（交州）へ唐の提督（鎮南都護。当時ベトナムは唐の支配下にあった。）として赴任されたとのこと。ハノイのベトナム国会の建物の地下には、この頃の提督宮殿の遺跡があります。学芸員の方と話し込んだのですが、どう見ても 8 世紀には、唐の提督がここにいたはずだと言われていました。阿倍仲麻呂さんは、実は我々がよく通ったベトナム国会の地下の宮殿にいたのかもしれない。これは 1 つのロマンですが、状況証拠的にはかなりの確度がある推論です。

それから朱印船貿易の時代です。この頃、幕府が発給した朱印状の宛先として 1 番多かったのがベトナムだそうです。ルソンとかアユタヤもありますが、日本から出帆して台湾海峡を越えると、直ぐにベトナムに着きますし、海岸線も長いですから、そうかなと思います。織物や陶器、香木などがベトナムからもたらされ、ホイアンには大規模な日本人街がありました。

16世紀から17世紀の朱印船貿易



安南（ベトナム）や暹羅シヤム（タイ）との貿易で活躍した荒木宗太郎の船を描いたもの

ホイアン旧日本人街に展示される朱印船

長崎県からホイアンに寄贈された朱印船（レプリカ）



右側の写真は長崎の商人荒木宗太郎さんという方がホイアンに行った時の朱印船のレプリカです。長崎の人たちは今もそのことをよくご存知で、この朱印船のレプリカは、長崎県知事が寄贈されたものです。ホイアンの旧日本人街の入り口に展示されています。



ホイアンに日本町が築かれる。現在も日本式の橋「日本橋」が現存。

今もホイアンに残されている日本人商人谷次郎兵衛のお屋敷

日本人街があった場所には日本橋と言われている橋が現存しており、元々日本人が作ったもので世界遺産になっており、当時の日本人の墓もまだしっかり管理されています。

長崎の祭り「長崎くんち」



「長崎くんち」において、7年に1度「御朱印船」の演目で再現されている。日越外交関係樹立50周年を記念し、昨年10月に開催されるお祭りで披露された。

50周年記念オペラ：アニーオー姫



日本の商人・荒木宗太郎と結婚したベトナムのゴックホア姫。2人の恋物語を題材にした、新作オペラ「アニーオー姫」が昨年9月に世界初演。島イヘラの洋一ビジュアルはホイアン在住の日本人アーティストが作成

アニーオー姫の鏡

長崎とホイアンの間には、地元ではよく知られている古いラブストーリーがあります。17世紀の朱印船貿易の時代に、ホイアンのお姫様と長崎の商人荒木宗太郎さんが結婚されて、お姫様が長崎へ嫁がれ、財宝を積んで朱印船で長崎へ来られました。その様子は、今も

「長崎くんち」で再現されています。ただ鎖国になってしまい、ベトナムへは戻れなかったという悲劇性もあります。昨年、日越外交関係樹立50周年だったものですから、このお話をオペラにいただき、秋篠宮両殿下が9月にベトナムへお越しになられた際に、ハノイのオペラハウスで世界初演をいただいたこともしもありました。

里山的環境に育まれたコミュニティ意識

日本の里山のイメージ



出典：静岡市作成パンフレット

最後になりますが、これは静岡市が作られた里山の絵です。私はよくベトナム学生への講演でこの絵を見せ、「これはどこの絵だと思いませんか？」と尋ねると大体の学生は「ベトナムだと思う」という回答でした。

フート省の景色



この写真は、ベトナムの国作りの神話の舞台になったフート省の景色です。写真にある里山の景色は、ベトナム人の原風景でもあるのです。日本人も故郷と言った場合は、里山の光景が心に浮かんできて、里山を自分たちの原風景と感じているということをベトナムの方に言うと、彼らはとてもシンパシーを感じてくれます。水田があり、川が流れ、家畜がいて、木々が繁り、果物が成る、これらはまさにベトナム人の原風景と全く一致しています。

フート省の景色



3. 「里山」コミュニティ：

- ・日越双方の社会意識の原点の一つは「里山」にある。
 - 温暖な気候、降水量、高低差、多数の河川、肥沃な土地等、日越には「里山」を生み出す共通条件がある。
 - 越の国づくり神話の舞台フート省は、典型的な「里山」
- ・「里山」社会の特徴は協調性重視 (cf. 「大陸」社会)
 - 越の理想的指導者像＝ホーチミン国家主席 (ホー叔父さん)

里山というのは、日本における社会関係の基本を作ってきたもではないかという仮説があります。よく縄文時代に里山があって、それが日本の社会関係つまり協調性を作ってきた原型ではないかと言われる方がおられます。ベトナムの社会関係もやはり協調を非常に重んじます。私は外交官になり、外交官とは空気を読まない人たちと付き合う仕事だと思っていたのですが、ベトナムに行き、初めて空気を読む人たちと付き合いました。だからコロナの初期にベトナムはロックダウンを行い大成功しました。あれは公安が何を考えているかとい

うことを、みんなが空気を読んで知っていて、みんなが一致して行動したからです。ベトナム戦争の時の彼らの戦争の強さなどもそういうところにあると思うのです。

ベトナムの理想的指導者像というのはホーチミンさんみたいな方で、包容力があり、腹は座っているが優しく、暖かい方です。同時代の共産主義の指導者として、毛沢東さん、スターリンさんがおられますが全然違うタイプです。ホーチミンさん自身、独裁者は嫌だと言って自分への権力の集中を拒否され、さきほど4トップと申し上げましたが、ベトナム独自の共同指導体制を築かれました。自分は国家主席をやるけれども、書記長と首相は他の人がやるべきだという信念で、頑として変えませんでした。もちろん国民の尊敬はホーチミンさんに一身に集まっていた。

そういう里山的な社会関係、人間関係、そういったものがベトナムと日本を近づけている1つの要因かなと思っています。例えば職場や工場とかは特にそうです。やはり、ベトナム人の労働者に日本の工場に馴染みやすい人が多いのは、ベトナムに、日本と共通した社会的な背景があるからではないかと、このように感じている次第であります。

以上で終わります。本日の話が、皆さまがベトナムを理解されるきっかけとなれば幸いです。

(終了)